

## 【説明会資料】 児童生徒によるプレゼンテーション

### 【英語スピーチコンテスト】

#### 武藤 隆修(6年生)



それは、去年の英語スピーチコンテストからの思いだった。「来年のスピーチコンテストこそ1位とる!」今年9月上旬。ネットでできそうなスピーチはないか探すとレオナルド・デカプリオさんの国連気候変動サミット2014のスピーチを見つけた。僕の夢は俳優になることなので、このスピーチにした。覚え方は、去年の方法を思い出し、①覚える段落を音読、②暗唱、③自分の暗唱を英語の得意な人(僕の場合は姉)に聞いてもらい、アドバイスしてもらう。という方法だ。これでエントリーに間に合った。その後嬉しい決勝出場の通知が来た!決勝当日まで練習を続け、さらに良いものへと近づけた。決勝当日スピーチの時、少し緊張したが自分のベストを尽くしたスピーチをし、1位という嬉しい榮譽につながっている!

#### 野崎 莉琴(8年生)



今年のスピーチコンテストは私にとってセカンダリー最後のものであり、且つ3回目の挑戦でした。今回は今までとは違い、予選があったので例年より早めに原稿作りに取り掛かる必要がありました。夏休み明けからはネイティブの先生と何度もその原稿のやり取りをし、そして10月には主として8年生が率いる運動会という仕事があった為、先生との本格的なスピーチの練習はその後から始めました。予選通過後は家での練習と、昼休みや放課後を使い、予選以上に良いスピーチができるよう先生と練習しました。本番は例年よりその場にいる人数は少なかったものの、カメラがあったので少し緊張しました。こうして人前に出てスピーチをすることは、英語に限らずとても良い刺激となり、自分が社会人になった時、必ずやこの経験が役に立つだろうと確信します。このような素晴らしい環境を作って与えて下さった先生方や、練習を手伝ってくれた先生方にはとても感謝しています。

### 【第70回全国小・中学校作文コンクール受賞】

読売新聞社主催の「第70回全国小・中学校作文コンクール」で、7年・鳥羽美弥さんが最優秀賞を受賞し、埼玉県知事から賞状が授与されました。さらに47都道府県最優秀賞の中から各部門10名が選ばれる中央審査では、全国3位となる「JR賞」を受賞しました。(新聞記事参照)

#### 鳥羽 美弥(7年生)



自分が「伝えたい、書きたい」と思ったことを書いた作文で、このような賞を受賞することができ、とても嬉しいです。この作文で書きたかったことは、私が一年生の時に、入学式で手をつなしてくれた四年生との「絆」と「縁」についてです。偶然同じチームになった四年生の「なっちゃん」と、様々な出来事を通して、家族ぐるみの深い絆が作られました。

開智の魅力は、異学年齢学級で歳の離れた人とも交流ができるので、いろんな人の考えや意見を自分の中に取り込んでいけるところだと思います。私はこれからも作文コンテストやスピーチコンテストにチャレンジして、私が「なっちゃん」に憧れたように、下級生から「あんな上級生になりたい」と憧れられるような上級生になりたいです。

最近では、授業中に本を  
読みたくなっても我慢し、  
ビー玉の迷路を作る授業  
で、友達にアイデアを出し  
てあげたら感謝されたとい  
う。本人は「将来は家の設  
計をしたい」と夢を語って  
いる。

## 祖父と対話 戦争知る

私立開智小6年

### 小沢萌々夏さん

「戦争は建物や自然の破  
壊、殺人といった『目に見  
える戦い』があるだけでな  
く、人々の心を傷つけると  
いう『見えない戦い』があ  
る。この祖父のメッセージ  
を文章にして伝えられて良  
かった」と喜ぶ。

作品はコロナ禍の4月、  
7月、福島県に住む祖父と  
戦争について何度も電話で  
話し合ったことを描いた。  
祖父は海軍兵学校に入って  
軍人になるのが夢で、卵1  
個を兄弟5人で食べ、小学  
校に爆弾が落とされて校長  
先生ら3人を失い、敗戦を  
受け入れるのに2、3年か  
かっていた。「本や映像で  
しか知らなかった戦争が、  
祖父を通してものすごくリ  
アルに感じ、戦争は誰一人  
幸せにしないことを痛感じ  
た」という。

## 先輩の闘病 絆を描く

私立開智中1年

### 鳥羽美弥さん

歴史上の人物に興味があ  
り、週6回、水泳に打ち込  
む。引き続き作文に取り組  
み、将来は、「ディズニー  
ランドのパレードの車を造  
る」のが夢という。

異学年交流が盛んな小学  
校の入学式で、4年生の「な  
っちゃん」が手を引いてく  
れ、その後も、男子にから  
かわれて泣いた自分をなぐ  
さめてくれた。その学年の

3学期、なっちゃんは白血  
病で入院し、その後、骨髄  
移植を受け、学校に戻った。  
移植から今年で5年。なっ  
ちゃんは高校1年生になっ  
た。

姉のようななっちゃんの  
闘病を振り返り、取材もし  
て作文を書いた。偶然、な  
っちゃんは私の手を引き、  
縁あって私の叔母がなっち  
やんの主治医になった。不  
思議な巡り合わせから絆が  
生まれ、級友もなっちゃん  
や家族を励ましたことを描  
きたかった」という。なっ  
ちゃんの担任も経験した松  
本敦教諭は「医学の知識も  
取り入れ、闘病の様子を丁  
寧に描いた」と評価する。  
本人は江戸時代が舞台の  
小説に夢中で、「将来は人  
の命を救う外科医になりた  
い」と話している。



受賞を喜ぶ(左から)鳥羽美弥さん、小沢萌々夏さ  
ん、松本敦教諭(さいたま市岩槻区の開智小で)

主催||読売新聞社  
後援||文部科学省、県、  
県教育委員会  
協賛||JR東日本、JR  
東海、JR西日本、日本テ  
レビジョン放送網、日本書院、  
光村印刷  
協力||三菱鉛筆